石巻市内で活動している社会福祉法人のご紹介
第１４回インタビュー
社会福祉法人ふれあいの里（ラボラーレ）

平成２８年４月から改正社会福祉法により、社会福祉法人による「地域における公益的な取組（社会貢献事業)」の実施が法人の責務として位置づけられました。

この取組は、次の３つの要件をすべて満たすことが必要となります。

（１）社会福祉事業または公益事業を行うに当たって提供される「福祉サービス」であること

（２）「日常生活又は社会生活上の支援を必要とする者」に対する福祉サービスであること

（３）無料または低額な料金で提供されること

具体例としては　・夏祭り等、イベントの開催による住民間のつながりの再構築
・働き手が少ない商店街との連携による就労支援
・公共交通機関がない地域での移動支援や買い物送迎支援
・災害支援ネットワークによる避難所支援
・刑余者の自立支援に向けた自立準備ホームの登録

などが挙げられます。

石巻市内にはたくさんの社会福祉法人がありますので、実際にどんな社会貢献事業に取り組んでいるのか、順番にご紹介していきたいと思います。

今回は「社会福祉法人ふれあいの里」さんをご紹介します。インタビューにお答えくださった方は、在宅障がい者多機能支援施設 ラボラーレ 施設長の萬代美保さんです。

社会福祉法人ふれあいの里

■法人所在地　宮城県登米市迫町新田字狼ノ欠２０番地４２０
■事業所所在地　在宅障がい者多機能支援施設ラボラーレ：石巻市桃生町中津山字八木５４番地
■電話番号　０２２５－７９－２０７１
■ウェブサイト　https://fureai1117.com/
■設立年月日　平成16年１１月１２日
（在宅障がい者多機能支援施設ラボラーレ事業開始年月日は、平成17年10月1日）
■事　業　地域密着型介護老人福祉施設入所者生活介護（地域密着型特別養護老人ホーム)、短期入所介護（介護保険)、生活介護、自立訓練・生活訓練、就労移行支援、就労継続支援Ａ型、就労継続支援Ｂ型、日中一時支援
■施設・事業所　在宅障がい者多機能支援施設ラボラーレ
■社会貢献事業

（１）小学校へ福祉教育としての講師派遣

地元小学校の児童向けに、「介護福祉士になるには？」等をテーマに職員ならではの視点でお話ししたり、施設利用者の方からは障がいがあっても工夫しながら生活していることを伝えたりして、児童の福祉分野への関心を深めています。小学校での交流があることで、道路ですれ違ったときにはお互いに手を振る関係ができています。

（２）配食サービスの提供

ラボラーレでは、低額な料金での配食サービスを行っています。利用者のみなさんが配達まで行い、地域の方との交流も生まれています。また、新型コロナウイルス感染症が流行する前は、施設内でランチの提供を行っており、訪れた方にご好評いただいていました。ご近所の方と利用者の方々との交流も生まれていました。

（３）地元サロンへの訪問販売

ラボラーレで作ったパンを地元の子育てサロンなどで販売。徹底した衛生管理のもと、丁寧に心を込めて作られたパンは大変好評で、対面で販売することにより、自分たちで作ったパンの行き先と購入者の反応が見えることは、利用者のみなさんにとって更に地域との一体感を感じる機会となっています。購入者からの感想を電話でいただくこともあり、一体感は購入者側でも感じていることと思います。

――今回は障害福祉と高齢福祉サービスを担う社会福祉法人として、ふれあいの里さんをご紹介します。ふれあいの里さんは登米市と石巻市で事業展開をしており、法人事務局はお隣の登米市にあります。石巻市では桃生町にて障害福祉サービスの提供をしております。

それでは、石巻市で「ラボラーレ」として行っている社会貢献事業についてお話を伺います。

新型コロナウイルス感染症の影響で厳しい状況かと思いますが最近の社会貢献事業について、状況はいかがでしょうか。

萬代：正直に言えば、事業の運営自体が苦しいですね。事業活動の展開としても、ここでは就労継続支援B型事業所があって、パンの販売やお弁当の販売、あとは農作物としてイチゴなどの販売を行っていて、いわゆるコロナ禍でも活動は継続していたものの活動の制限もあり、細々と線のように繋がってやっているというのが今の運営状況です。

地域の方、高齢の方に低価格（少し値段を下げて）でお弁当を配達していましたけれども、コロナ禍では注文が減ってしまいました。

当施設は多機能事業所です。生活介護の分野で、ちょっと身体が心配でお家から出るのが不安になり、今まで利用していたけれどもコロナ禍で利用できなくなった方がいて、その方々とは定期的に連絡を取りました。施設の利用ではないですが、ご本人やご家族との電話連絡、あとは月に一度、その方が好きなものをお手紙にして郵送させていただいていました。実際会ってというよりは、電話などで声を聞いての繋がりというところがメインとなっていましたね。

お弁当配達や低価格の食事提供というのはコロナ禍に入る前と比較してまだ下火です。これまでご注文をいっぱいいただいていたものも、ピタッとなくなってしまっていました。ラボラーレ側としても販売に伺うこと、いろんな方が大勢集まるところに利用者さんと行くということを控えていたというところもあります。

最近はみなさんにご協力いただいて受注がちらほら再開できているので、それはすごく嬉しいという思うところです。

左がラボラーレ、施設長の萬代美保さん

――今は、パンの販売を再開くださっているようですね。

萬代：パンの販売やお弁当で声をかけていただいている、そういうところからまた地域のみなさんに広がって行けば良いなと思っています。

コロナ禍になる以前は、地域サロン活動のお弁当などの受注もあったのですが、お茶っこ飲み自体が新型コロナウイルス

感染症でなくなったこともあり、自ずとサロンも開催されず、受注がまったくなくなりました。

――そうなると、利用者の方の工賃をお支払いするのが大変だったときもあるのではないでしょうか。

萬代：コロナ禍では調理関係の活動に力を入れられなかったので、農作物の生産を多くすることでカバーできたのかなと思っています。納品して、スーパーなどで買っていただくという。ただ、顔を見ての関わり、やり取りが減ったことは、人との関わりが好きな利用者さんたちにとっては寂しいことだったと思います。

実際自分たちで作ったものを直接販売して、お客さんとやり取りをし、声をかけていただくことは、すごく利用者さんの励みやパワーのもとになります。

モノだけ作り、納品する、という形になると、その先のお客さんの反応は想像するしかないので、それがなかなか実感として湧きづらい利用者の方もいます。実際に体験して、体感して、「また次も頑張るぞ～」ということがコロナ禍では減ってしまいました。その中で、少しでも補えるよう、職員も説明したり、写真を使ったり工夫して活動していました。

――お客さんがいて、感想をいただけると次に繋がる励みにすることができますよね。

萬代：ありがたいときだと、お電話までいただいて、「今日のパンおいしかった」とか「どごのあんこを使っているの？」などの声がありました。対面での「おいしかったよ」の言葉、そういう顔の見える繋がりというのは、これからコロナ禍が緩和されていく中で盛り上がって行き、その中でラボラーレが貢献できることが新たに見つかると良いなと思っています。

コロナ禍に入る前などは、近所の方がランチを食べに来てくださったということが何回かありました。施設の場所が奥まっているので、分かりにくいと思うのですが、声がけしていただいたりして、少しずつ来てくださっていました。

丹精を込めてパンを作っています

――みなさんは、施設内のどの場所でお食事をされていたのですか？

萬代：今はフロアの一角に仕切りをして黙食としていますが、以前は仕切らず、フードコートの様にしており、利用者さんたちにも好きな場所を自分で選んで食べていただいていました。お客様が来ると分かれば予約席としておいて、そこへ利用者さんがお茶を出して、というような、住民の方もウェルカムな交流の場所になっていました。また再開できたら良いなと思います。

――地域にある施設で交流が生まれていて、ごく当たり前に障がいのある方々と過ごしているという環境があるということはとても重要なことですね。コロナ禍が終息してからできたら良いなと思うことについて、ほかにもお聞きしたいです。

配食サービスのお弁当

萬代：まずは、以前の活動が元通りにできることが嬉しいなと思います。その中で、社会も変わって来ていますので、変化しながらやって行けたらと思います。まったく新しいことを突然始めるのは、職員の負担も大きいと思っています。「昔こういうことをやっていたよね」というところから展開できたら良いかなと思っています。新しいことをパッと始めることより、今までの積み重ねを大事にして行くのが得意なところがあります。そのなかで、変化を持たせて行くという方法であればできると思います。

　コロナ禍でできなかったことは多いけれども、積み重ねが消えるわけではないので、ここからまた良いものを積み重ねて行きたいです。小学校との交流や地域の方への低価格でのランチ提供であるとか、そういったことを要望があれば再開していきたいです。

――地域の方が施設に来ること、小学校の児童の方と交流することはほかの施設などでもあって、簡単ですぐできそうと思ってしまうのですが、実はこれはすごく大事なことで、自分の周囲に障がいがある方がいたときどう対応したら良いのか、また自分自身が障がいを持ったときにどうしたら良いのかと考えたときに、このように生きがいを持って過ごしている方々の姿を見て、知ることは大切なことだと思います。

萬代：交流があったときは、小学４年生くらいの子どもたちが何人か利用者さんと一緒にやるゲームを考えてきてくれて、一緒に遊び、歌を発表して帰るということをされていました。つかの間の時間だったのですが、その後にラボラーレの送迎の時間と小学生の下校の時間が重なり、道路ですれ違ったときに手を振ってくれて、すごく嬉しかったですね。そういったちょっとした繋がりが、お互いが困ったときに声がけできる関係性の第一歩だと感じます。まったく顔を合わせたこともなく知らなければ、声をかけるのもなかなか躊躇してしまうと思います。

――本当に小さなことと思うのですが、意識の変化は大きいものですよね。児童生徒に関連して、ふれあいの里さんとしては、小学校の「お話を聞く会」に講師を派遣されたとも伺っています。

萬代：はい、行きました。以前、登米市

の小学校へ「介護福祉士になるには？」ということで、介護福祉士はどんな仕事をしているのかをお話ししに行きました。子どもたちに伝える際、介護福祉士というのは大きなテーマだなと思いました。私の勤めている施設ではこうですよ、という形のお話となりましたが、子どもたちは熱心に聴いてくださいましたね。

その時は、とある車いすを使っている利用者さんがお母さんに指輪を買いたいということがあったのですが、それをテーマに「じゃあどうやって買いに行こうか？」と、利用者さんのニーズや要望を子どもたちと一緒に考えました。

利用者さんがやりたいことを実現するには、どうしてもサポートが必要な場面が出てきます。そのときにお手伝いする気持ちも大事だけれども、やっぱり勉強しておかないといけないことがあって、例えば「車いすの操作や、立ち上がるときの動作のポイントなどは、知識と技術が必要だよ」というふうにお話を展開したのを覚えています。

――ただ、そうしてあげたい、そうしたほうがいいと思っていても勉強しないとできないことはあると思います。障がいがあるといってもいろんな障がいがあって、特性に合わせた支援や介助が必要になりますね。

萬代：結局、「勉強は必要だよ、知識と技術は必要だよ。でもそれにはやはり、その方を思う気持ちがないと勉強にも力が入らないし、どうなりたいか？という気持ちがあれば自ずと頑張れる」ということもお話ししたのを覚えています。

盛り上がったのが「膝より前につま先が出ていると立ち上がりづらいよ」というお話で、実際自分で膝より前につま先を出して立ち上がってみると、子どもたちは「立てない～」と言います。「その立てない動作で無理にお手伝いをして立ってもらおうとしても立てないよね。やっぱりこれは知識が必要だね」と。中には意地でも立ってみようとする子がいたりして、そうやって実際にやってみて体感すると、難しい講話とは反応が違い、私自身も楽しかったのを覚えています。

そして他の回だと、せくれ（登米市にある特別養護老人ホーム）のケアマネジャーさんが、職種についてお話しにいったこともありました。

――桃生地区でも児童生徒さんにお話をしに行ったことはあるのですか？

萬代：お話を聞く会とは別ですが、桃生地区にある小学校の依頼で、福祉教育の一環として総合学習の時間にお話に行ったことがあります。職員１名が、その時は電動車いすの利用者さんと一緒に伺いました。利用者さんがこれまで自分で旅行したときの写真を持っていって、「車いすだけれど、こういうこともできたよ、でもお手伝いが必要なところもあったよ」とお話をしてくださりました。

――車いすにのっている姿を見てただ、歩けなくて大変だな、かわいそうだなと思ってしまうことがあると思うのですが、

でも実際こういうことが「できる」という切り口の方が、子どもたちも「すごいな」と印象が変わりますよね。

萬代:その利用者さんは本当にすごくて、川の上で桶を舟のように乗る観光地ってありますよね。それに乗った写真を持って行ったんです。桶に実際乗ったお話をしたとき、子どもたちはびっくりしていたと思いますね。「乗れるの！？」って。でも「お友達にサポートしてもらって、乗れて楽しかったよ～」というようなお話を利用者さんがしてくださって。子どもたちとそういう交流がまた始まればと思います。

小学生との交流

――今回取材を通してお話を聞くことで、私たち社会福祉協議会としても知らなかったことがたくさんありました。改めてすごく勉強になっています。

萬代：お話が昔（コロナ禍前）の事ばかりで申し訳ないです。ですが、これからまた実施したいというのが、今の想いとしてありますので。

――今求められていることというと、感染症もそうですけれども、災害に関しては地域の方と共同しなければならないというようなことが令和３年度から厚生労働省から示されておりますが、その辺はいかがでしょうか。

萬代：地域の消防の方にご助言いただいて、避難訓練などをやっており、連携という部分では、地域の情報を集め、教えていただいている状況です。

――施設のある場所だと、水害ということになるでしょうか。以前の台風（令和元年）もなかなか大変だったのではないでしょうか。

萬代：ビニールハウスがちょっと壊れました。実際、浸水は大丈夫でした。

やっぱり地域の方と顔見知りになることが必要だなと思ったのは、東日本大震災の時でした。この施設は通所事業所で宿泊施設ではありません。お家に帰れない、帰せない方々がいる時間帯だったので、近くの小学校の体育館へ避難する形となりました。体育館の一角を借りていたのですが、地域の方と顔なじみの関係にあったことで、不安の中でも「知っている方が周りにいる」という安心に繋がったと感じました。

桃生総合支所の保健師さんからすごく声をかけていただいたことを覚えています。保健師さんは利用者の方々にとっても顔見知りです。とても気にかけてくださっていて心強かったという記憶があります。

今後もこの近隣であれば、避難して避難生活が何日か続くとなったときに、知

っている人や子どもたちがいたら、利用者さんも安心かなと思うところです。

――顔つなぎが有事の時にも活かせるということですね。

萬代：声をかけていただけるというのは本当に嬉しいです。

――障害者差別やバリア（障壁）というような話がありますが、本当に触れ合えば、そこで解かれていくものと感じます。

萬代：私もそう思います。私は小さい頃、周りには障がいのある方がいなかったのです。そういう環境の中で友達の家に遊びに行ったときに、障がいのある親戚の方が遊びに来ていて、今思えば大変失礼なのですが、正直怖かったのです。当時は怖かったのですけれど、今は一緒にいて楽しいというか。なぜその時怖かったと感じたんだろうと思いましたが、それは障がいについて知らなかったからですね。何かをされたわけでもないですし、ただ、そこにいただけなのですが、私の中ではちょっと怖いという。それを未だに覚えているのですけれど、今は障がいのすべてを知っていると言える自信はありませんが、あいさつを交わしてやり取りをして、コミュニケーションをしているので、何も怖いものはないです。むしろ一緒にいてくれてありがたいというか楽しいというか、そんな感じですね。

　地域の子育てサロンの七夕会の時などにパンの販売に呼んでいただいて、そういうときに小さいお子さんたちと利用者さんが関わる機会があるので、小さい頃からみんなと関われれば良いのかなと思います。

――自分たちが子どもの頃の障がい者の方を取り巻く社会や環境と、今は違うような気がします。４０年近く前の事になりますが、その頃は障がい者の方はどちらかというと、町場というよりは、山奥の施設に行くというイメージでした。学校の授業でも、はしっこにいて、ある時間になると別の教室に行ってしまうという。そういう環境の中だったこともあり、相手を知らないことで漠然と怖いと思っていたということはあったと思います。今は障がい者の方が以前と比べて社会参加しています。関わりの増加や環境の変化から、受ける印象も変わってきているのかなと思います。

萬代：なぜかはしっこの方にいたイメージがありますね。教室でもはしっこで、中央ではなかったように思います。

　利用者さんたちの要望も聴きながらですが、利用者さんたちの中にもみんなと関わりたいという気持ちがあると思うので、関わり方の練習や、「どうしたらいいか」というのを私たち職員も一緒に考えていきたいと思います。交流はどっちが先とかではなく、利用者さんからも関わっていかなくてはいけないと思いますし、もちろん障がいの有無は関係なくみんな一緒なのだと思っているので、障がいのない方からも、「どっちからどっち」ということなく関わりあって行くということかなと思います。

――この仕事をしていて、幸せって何だろうなと思うことがあります。障がいがあるなしに関係なく、生活困窮に陥っていたり、学生時代にたくさん勉強をしても大人になって精神的に追い詰められて休職してしまう方がいたり、何をもって幸せと感じるのかなと常々考えてしまいます。そんな中で、すべての方とは言いませんが、すごく楽しそうに過ごしている障がい者の方を見ると「ああ、この方は今、幸せなのかな」と感じたりすることがあります。

萬代：それはすごく思います。なんだろう…。私からしてみれば大変そうだなと思っても意外に楽しそうにしていたりして、もちろん幸せだったら良いかなとは思うのですが、でも、それで良いのかな…、と思ったりもすることはあります。私が「違うよ」と言うのも変だし、「それは絶対大変だよ」と言うのもすごくおかしいことだなと思うし。その方が自己選択で決めて、「楽しかった、良かった」と思うことができれば良いのかなと思っています。

幸せそのものよりも幸せを感じる心を持てることが大事だと思っていて、それを持つには余裕がないといけません。一人だと辛くなったり、いつも良いと感じられていることが、逆に苦しくなると、同じように感じられなくなったりしますよね。その時にサポートして、その人が幸せを感じる心が回復すれば良いなと思ったりします。

――上手に感情をコントロールすることが難しいときは、サポートが必要ですね。

萬代：そうですね。いろんな苦手、得意不得意がありますから、お話を聴きながら「その人の幸せ」を感じていただけるようなサポートができたらと思っています。それは多分、ここに来ている利用者さんにだけ感じていただくのではなく、ラボラーレに関わるいろんな方々に感じていただきたいかな、と思います。

自分の幸せを感じるポイントを利用者さんに紹介したら「それをやってみたよ、最高だった～」と言ってくれた方がいて、幸せのお裾分けというのかな、そういうのができたらなと思います。それをするかしないかは本人次第ですが、いろんな情報提供ができれば良いなと思いますね。

いっぱい話をしているといろんな話題が出ます。地域の方にも自分には持っていない知識や、幸せのポイントなどがあるかと思うので、今後関わりを広げ、増やしていきたいですね。「地域の方がこんなこと言っていたけれどやってみようか」とか、それで楽しかったら嬉しいですし。

――この仕事をしていくうえで、知識と技術だけではなく、そういった感性も必要だと思います。

萬代：感性は必要ですね。いろんな感性を持った利用者さんが多く、私たちが「いただいていること」の方が多いですが（笑）。年齢層も幅広く、みなさんいろんな人生を歩んできていらっしゃるので、すごく考えるきっかけをくださいますね。

中には話すことが難しい方もいて、その方が何を思っているのかを感じ取るというか、汲み取るのは難しいのですけれども、そこは今後も続けて行きたいと思いますね。

――私たち福祉専門職に求められるところは、利用者の自立支援における意思決定だったり、意思表出だったり、そこの支援をして行くことの難しさはありますよね。

萬代：難しいですね。１００点だったなという日はまずなくて、もちろんそう思わないようにしています。そこで１００点だったと思ったら終わってしまう。工夫も発展もありません。むしろ、もっとできたことはあったはずだ、と思うのです。話せない方にはもっとコミュニケーションを深めていくというか、その方にもきっと、幸せと思う瞬間も、嫌だなと思う瞬間も、もちろん何も思っていない１日もあり、いろんな感情があると思うので、思いを代弁できたらというか、その方の思うやりたいことに繋げていけたらとは思います。

― インタビューを終えて ―

ふれあいの里さんの「ラボラーレ」に伺ったとき、印象的だったのは利用者さんが駆け寄ってきて、前からの知り合いのように感じるあいさつを交わし、笑顔を向けてくだったことです。

施設は、奥の方からおいしそうなご飯の匂いがしており、光の差し込む開放的な空間が広がっています。

インタビューの中で、職員の方の優しい表情や声色から受けた印象はとても穏やかで、それがこの空間全体に伝播（でんぱん）しているのではと思いました。

人と人、当たり前のことですが対等な関わりの中で利用者さんから職員の方へも、多くのものが伝わって相乗効果を生み出しているように感じます。

実際の活動をお聞きし、障がいの有無に関わらず「みんな」であり、お互いに「知る」こと、「関わる」こと、関わるにはどうすればよいかを「共に考える」ことは無意識のバイアス（偏見）を解く第一歩だと感じ、つながりを大事に育てていくことの重要性を再認識しました。

今後も知ること、関わることの一助となれるよう一緒に取り組んでいきたいと思うインタビューとなりました。